

「それぞれの動機」を尊重する 面倒でハードな道のりが 新たな価値を創り出す



共創で
できる
関係



安齋勇樹
MMIGUR代表取締役COO
東京大学大学院 客員研究員

慣れ親しんだチームや業界から飛び出し、外の人たちと協働する——高校現場に限らず、大学や企業でも、組織外の人とのコラボレーションの機会が増えています。よく使う言葉も文化も価値観も、時間感覚すらも違う人たちが、一つのプロジェクトに取り組む。このとき陥りがちなのが、目指したい成果や取り組む内容について話したところで、すぐに「では私はこれをします」「こちらはこんな協力ができます」と、互いのリソースの交換に入ってしまうこと。すると、ゴールは確認したはずなのに、なぜか話が噛み合わなかったり、すれ違いが生じたりします。活動のゴールとは別に、参加者はそれぞれ異なる動機や期待をもって、その場に集っているからです。

学校の外の人たちが、学校や教育に携わることの動機は、実に多様です。社会貢献。自身のキャリアアップや経験のため。若い世代の率直

な声が聞きたいという人も。さらに個人の動機とは別に、所属する組織のねらいもあるかもしれません。人が何かに取り組む動機はさまざまです。その多様な動機を理解し、尊重し、それぞれの目的を達成できるように助け合いながらも、みんなで一つの成果を目指す。この、面倒でハードな道のりこそが、「共創」に必要なプロセスだと、私は考えています。

例えば尾田栄一郎さんの漫画『ONE PIECE』に登場する、麦わらの一味の旅が、まさにそうです。それぞれがバラバラな夢とバラバラな能力をもち、それぞれの夢を叶えるために一つの船に乗っている。彼らは「次にどの島を目指すか」については合意形成をしますが、「旅する目的をすり合わせて統一しよう」なんてことはしません。異なる動機を理解し、尊重し、助け合うことが、何が起きるかわからない航海を乗り越える力になっているのです。

だから私は、活動に関わる人たちに「なぜ、この取り組みをするか」、組織として、また個人としての動機や期待を聞くようにしています。もちろん、自分の意志ではなく参加している人もいるでしょう。そんなときは「どうせやるなら」こういう機会にしたい、と思うことはありますか?」「この場を通じて“個人的にやってみたいこと”はありますか?」とハードルを下げて聞いてみると、率直な想いが聞けることがあります。何も、立派な動機でなくていいのです。それぞれの「らしさ」を大切に、共に何かを創り出していく。日頃は教室運営を一手に担っておられる先生方ですが、時には、その“お一人で率いる”モードから少し離れて、肩の力を抜きながら、助け合い、共に創り出す関係を楽しんでいただけたらと思います。

共創でできる関係



安斎勇樹

 MMIGU代表取締役Co.CEO
 東京大学大学院 客員研究員

Profile

あんざい・ゆうき●1985年生まれ。東京都出身。東京大学工学部卒業、東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。博士(学際情報学)。企業経営と研究活動を往復しながら、人の創造性を活かした新しい組織・キャリア論について探究している。主な著書に『問いのデザイン』『問いかけの作法』などがある。

冒険する組織のつくりかた「軍事的世界観」を抜け出す5つの思考法
 (発行: テオリア、発売: ディスカヴァー・トゥエンティワン)



取材・文／塚田智恵美 撮影／三井 実

